

ボーダーの城

北海道国際交流・協力総合センター客員研究員／国境地域研究センター理事・高田喜博

はじめに

私（筆者）は、城や城塞を歩いて、観て、調べるのが趣味で、これまで13カ国の381の城や城塞を訪ねた。そうした個人的な趣味とボーダーツーリズムに関連すると思われる城のいくつかを紹介してみたい。

ところで、日本の城の分類の一つに「境目（さかいめ）の城」というものがある。文字どおり敵対勢力の境目＝ボーダーに監視と防備のために築かれる城である。一般的には、国内の敵に対するものであるが、例外的に国外の勢力に対する城も存在する。本エッセイで取り上げるのは、そうした例外的な境目の城である。

白村江の戦いと古代の城

古代から九州北部は、大陸・朝鮮半島と日本列島の交流ルートの重要地点であり、日本列島の玄関口として機能していた。そのため、『魏志倭人伝』には「一大率」という交流のための施設のことが記録されている。また、『日本書紀』の宣化天皇元（536）年夏5月に、筑紫の那津（現在の博多湾）の口に「官家」（大宰府の前身）を置く詔が出されたとある。聖徳太子の対隋積極外交の時代である推古天皇16（608）年に、遣隋使小野妹子が隋の使者裴世清を伴って那津に到着するが、その時も「官家」が接受を行ったと推定されている。やがて『日本書紀』には、筑紫大宰（つくしのおほみこもち）が出てきて、それまでの「官家」は、この頃から「筑紫大宰」として整備されたと考えられている。この筑紫大宰は、後に大宰府と呼ばれるようになった。

天智天皇2（663）年、百済救援のために大和朝廷が派遣した遠征軍は、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗した。大和朝廷は、その反撃に備えて対馬や九州に防衛ラインを構築した。すなわち、大敗の年に那津にあった筑紫大宰（大宰府）を内陸に移転させ、翌664年に、対馬、壱岐、筑紫に防人と烽（“とぶひ”と読み「のろし台」のこと）を配置し、大宰府の前面に濠を伴った土塁である水城（みづき）を建設した。665年には、大宰府の背後（北）に古代山城（朝鮮式山城とも呼ばれる）である大野城、南西方面に基肄（きい）城を建設し、666年には対馬に金田城などを建設した。文献には、九州から畿内にかけて12もの古代山城が建設されたことが記録されている。

今から1350年以上前に築かれた城や城塞ではあるが、現在もかなりの遺構が残されている。私は、旅行や出張の際に水城、大宰府、大野城、基肄城を歩いてきたが、2015年と2017年のボーダーツーリズムでは、黒瀬湾の船上から金田城の大規模な石垣を観ることができた。福井県の水城、大宰府、大野城、佐賀県の基肄城と長崎県対馬市の金田城は、当時の国際情勢と日本の混乱を思いながら歩いてほしいと思う。

元寇と防塁

元のフビライは、高麗を通じて国書を送り鎌倉幕府に降伏を迫ったが、執権北条時宗はこれを拒んだ。文永 11 (1274) 年、900 の艘艦 (軍船) に分乗した 2 万とも 3 万ともいわれる元軍 (蒙・漢・高麗の連合軍) は、対馬、壱岐、肥前松浦を襲って、ついに博多湾に上陸した。これを迎え撃った日本の武士団は、敵の集団戦法や火薬を使った新兵器に大苦戦し、古代の太宰府の防衛ラインだった水城まで後退した。その夜、夜襲を警戒して軍船に撤収した元軍は暴風 (神風) に遭遇し、大きな被害を受けて退却した (ただし、近年の研究では、撤退の原因は神風ではなく、日本軍の抵抗と元軍の損害であったと考えられている)。

元は、その後も日本に使節を派遣するが、北条時宗は使者を切って、国防の決意を明らかにした。同時に、再度の来襲に備えて、鎮西奉行少弐経資に博多湾一帯に石築地 (石積み防塁) を築くことを命じた。九州の御家人が工事を分担し、建治 2 (1276) 年 3 月に着工、8 月には完成という突貫工事で、東は香椎宮 (箱崎) から、西は糸島半島の柑子岳 (今津の長浜) まで約 20km の防塁が完成した (完成に 5 年を要したとする資料もある)。

一般的な構造は、高さ 2~3m、基部の幅 3m、上部の幅 2.5m で、いたって簡単なものである。しかし、弘安 4 (1281) 年に、東路軍 4 万、江南軍 10 万の大軍が来襲した弘安の役の際には、この防塁が威力を発揮して元軍の上陸を阻んだ。その結果、元の部隊は二ヶ月近くを船上で過ごし、その間に台風 (神風) が元の艦隊を直撃して日本は救われた。

この防塁は、室町時代までは補修・維持されていたとの記録もあるが、やがて忘れ去られ、崩れ、埋もれていった。また、その一部は、福岡城などの石材に転用されたとも伝えられている。現在、西南学院大学の構内や今津、今宿、生の松原など、11 カ所の防塁跡が国指定史跡となっている。是非とも元寇の際の対馬や壱岐の悲劇を思いつつ、元寇防塁跡を訪ねていただきたい。

豊臣秀吉の朝鮮侵略と日本・韓国の城

織田信長に仕える軽輩からスタートして、天下人として関白太政大臣となるまでの豊臣秀吉は、苦勞人であり、才覚とエネルギーに満ちあふれた魅力的な人物であった。しかし、朝鮮征伐、朝鮮出兵あるいは文禄・慶長の役、壬辰・丁酉倭乱と呼ばれる侵略戦争を始めた晩年の秀吉は、老害の独裁者であり、誇大妄想の侵略者であった。

秀吉が天下統一事業のために構築した巨大な軍事システムを収斂させることができず、その矛先を安易に海外に求め、獲得した海外領土を分割することで国内での暴発を防ごうとしたのかもしれない。しかし、朝鮮国を服属させ、大明国、さらには天竺へ討ち入る (侵略する) という計画は、あまりに無謀で杜撰なものだった。そうした暴挙で犠牲になったのは、朝鮮軍、明軍、日本軍の将兵だけでなく、多くの老若男女の非戦闘員であった。

秀吉は、天正 19 (1591) 年 8 月、肥前国東松浦半島の突端近くに、海外遠征のための本

営として名護屋城の築城を命じた。同時に、進撃・輸送ルートに当たる壱岐の北部に勝本城、対馬の厳原にも清水山城の築城を命じた。また、朝鮮半島に上陸した豊臣秀吉軍は、後に半島南部の各地に多くの日本式の城を築いた。これは「倭城」と呼ばれ、現在は30か所近くの城址が確認されている。それらの城は、遠征軍の撤退と終戦とともに廃城となり、現在は石垣だけが残っており、また史跡となっているものもある。

玄界灘に面した名護屋城址は公園として整備され、江戸時代に「城割り」（城の破却）がなされたとはいえ、今も壮大な石垣が残っている。その周囲に、全国の大名の陣屋跡も残っている。また、隣接する佐賀県立名護屋城博物館も、是非とも立ち寄りた施設である。

唐津城に近い唐津東港と壱岐の南にある印通寺（いんどうじ）港との間はフェリーが就航している。印通寺港から北の勝本城跡（城山公園）までは、レンタカーで30分足らずで行くことができる。本丸址の石垣が残っているだけだが、公園内には松尾芭蕉の「奥の細道」の旅に随行し、蕉門十哲の一人に数えられる河合曾良の墓がある。

壱岐国は、『魏志倭人伝』には「一大國」、他の史書には「一支國」（いきこく）と記されている。その王都と想定される原の辻遺跡が「原の辻一支国王都復元公園」として整備されている。また、近くには一支国博物館（長崎県埋蔵文化財センター）があり、邪馬台国時代の朝鮮半島との交流の様子を観ることができる。

対馬を治めていた宗氏は、かつて対馬国の国府があったとされる厳原に金石城を築いた。その金石城を見下ろす標高206mの清水山に、秀吉の命令で清水山城が築かれた。現在も尾根に沿って三の丸、二の丸、一の丸（本丸）の石垣が細長く残っている。一の丸からの眺望が素晴らしい。

これらの城は、ボーダーツーリズムの中でもダークツーリズムに属する負の時代のものである。しかし、日本と韓国のより良い関係を築くためには、こうした時代を直視し学ぶことが重要であろう。

幕末の城

江戸幕府が元和元（1615）年に発布した武家諸法度には、「諸国ノ居城、修補ヲナスト雖、必ス言上スヘシ。況ンヤ新儀ノ構営堅ク停止セシムル事」と定められ、諸大名は居城の修理は制限され、新たな築城は一部の例外を除いて禁止されていた。ところが、幕末に異国船が日本近海に出没するようになると、海防を理由に蝦夷地の松前城と五島列島の福江城の築城が認められた。こうして、日本式築城の最後となる松前城と福江城が築かれたのである。ボーダーツーリズムで訪ねた長崎県五島市の福江城は、幕末に築かれた海城としての特徴を良く残しており、何度も訪ねたい城と城下町である。

この他にも城の話は尽きないが、これらの城の詳しい説明やアイヌのチャシを含む別の城や陣屋のことは、次に機会をいただいた時に書きたいと考えている。



大宰府政庁の背後の山全体が大野城であった



福岡空港を離陸した機上から水城跡の土塁を見る



名護屋城の大手道付近の石垣
城割で石垣の一部が破壊されている



清水山城一の丸の城門跡から厳原港を遠望する



釜山郊外にある機張倭城に残る日本式の石垣が積まれた櫓台



福江城の高麗門形式の搦手門と外濠